

高齢者大学に通う高齢者の「老人イメージ」に関する研究

自由記述から見た「老人イメージ」と主観的幸福感の関連について

高橋 一公（東京未来大学モチベーション行動科学部）

本研究は、高齢者大学にて継続的に学習を実践している高齢者95名を対象に、主観的幸福度および老人イメージについて調査・分析を行うことを目的とした。自由記述によって求められた「老人イメージ」について計量テキスト分析を用いて分析を行った結果、継続的に学習を実践している高齢者は「老人」という“ことば”に対するイメージとして共通して「自分は老人とは思わない」という記述を行っていることが示された。またPGCモラル・スケール得点が高くなるにつれて「年齢は感じるが、自分は若く動くことができると思う」という活動的な側面を捉えるのに対して、PGCモラル・スケール得点が低くなるにつれて「知識はあるが頑固で死に向かう人達のイメージ」という現実的でありながら否定的な側面を捉えている傾向があると思われ、主観的幸福感の高低が「老人」という“ことば”のイメージに影響を与えている可能性が示された。

キーワード：老人イメージ、高齢者大学、主観的幸福感、計量テキスト分析

問 題

老年観および老人イメージの測定

心理学における老年観あるいは老人イメージに関する研究は、一般的にセマンティック・ディファレンシャル法（以下SD法）が測定尺度として用いられることが多かった（保坂・袖井1986、1988、中野 1991、中野・冷水・中谷・馬場 1994、高橋 2006、2008）。その他、老年観スケールをも用いた研究（中谷 1991、馬場・中野・冷水・中谷 1993、高橋 2007）も見られる。SD法や老年観スケールはイメージの構造を明らかにするうえでは大きな貢献を残したが、それに代わる新たな方法を見出すには至っていない。老年観の測定を考えた場合、ナラティブ・アプローチを用いた分析も試みられているはあるが、その客観性や計量的な分析を行うには限界があると言わざるを得ない。

高橋(2012、2013)は試みとして大学生を対象に自由記述を用いた計量テキスト分析によって抽出語の共起ネットワークとSD法との関連を検討している。自由記述によるイメージ測定の客観的な評価の可能性を示したものの、回答者の表現能力やステレオタイプな“ことば”の抽出に終始してしまうことなどの課題をあげている。

高齢者の主観的幸福感

主観的幸福感（QOL）研究の発展の中で生まれてきたもので、QOLの主観的あるいは心理的側面といえる（石井 1997）。そしてこれは、人生全般に対する満足を含む広範な概念でありその測定指標も様々である。

Larson(1978)は自記式尺度によって測定される幸

福な老いの程度の総称としてsubjective well-beingを提唱し、これが日本において「主観的幸福感」と訳されたことによって、この領域での研究を前進させる貢献をした。下仲(1997)は主観的幸福感を「高齢者が自らの人生や生活に抱いている主観的な充足感」と定義している。そして、サクセスフル・エイジングの研究においてその指標の一つとして用いられている。

この主観的幸福感の代表的な測定尺度としてPGCモラル・スケール(Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)がある。Lawton(1975)はモラルの概念について検討し、「モラルが高い」ということは、「自分自身についての基本的な満足感を持っていること」、「環境の中に自分の居場所があるという感じをもっていること」、「動かしえないような事実については、それを受容できていること」という3つの意味が含まれているとしている。

PGCモラル・スケールを用いた日本国内の研究は、軽度認知障害者に対する主観的幸福感の研究やリハビリテーションのプロセスにおけるQOLの変化の指標として用いられているものが多い。健常高齢者に対する研究においては生活環境や地域の高齢者支援の観点から用いられているが（長田・山縣・中村・宮村・浅香 1999）、自発的かつ活動的な高齢者に対する研究において用いられることは決して多いとは言えない。今後、前期高齢者や健康な高齢者に対する主観的幸福感やQOLに関する研究が期待されるところである。

高齢者の学習意欲と主観的幸福感

堀 (2012) は生涯学習を視野に入れた高齢者の社

会参加のパターンとして「社会参加活動から生涯学習へ向かう流れ」と「生涯学習から社会参加活動に向かう流れ」が混在していると指摘している。その中で、「生涯学習活動→社会参加活動」の流れの中に「生涯学習そのものを目的とする場合」、「生涯学習の成果を他の社会参加活動に活かす場合」、「生涯学習活動に付随する人間的交流を目的とする場合」の3つが含まれるとしている。また、堀(2015)は高齢期の学習意欲の変化に関する研究において、学習ニーズに関して、「ライフレビュー」と「他の高齢者との交流」へのニーズが60代から70代にかけて高まることを示唆し、特に「他の高齢者との交流」において達成欲求から親和欲求への比重の移行と関連していると述べている。

高橋(2018)は高齢者の高齢者大学^{注)}への学習動機を、「学ぶこと」と「参加すること(二次的利得)」にまとめられること、そしてこの2つの動機がいずれも高い高齢者は「主観的幸福感」が高い傾向があることを見出している。その中で高齢者の場合、「知識の獲得」への期待よりも対人関係の拡大や余暇への期待が高齢者大学での学習動機になっていることを示し、「学習内容を地域活動などに活かしたいから」や「健康維持のため」などを選択する高齢者も少なくないことを加味すれば、学んだことを何らかの形で発信することを求めていると考察している。

主観的幸福感と学習意欲に関しては、百瀬・村山(2013)がシニア大学に参加している地域在住の高齢者の主観的幸福感について調査を行っている。身体的側面、社会的側面、対人交流面から検討を行い、自律した生活ができ、友人との良好な交流が交わされていること、自分のやりたいことで自己実現を図ることが生活上の満足感を高め主観的幸福感を向上させるとしている。

また、野邊・大須賀(2013)は老人大学の受講者を対象に交友関係と主観的幸福感に関する調査を行っている。その結果、交友する友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていること、特に年賀状

の交換やお茶を飲んだり食事をしたりする友人関係を持つ高齢者の主観的幸福感が高いことを導いている。

このように、高齢者の自主的な学習活動は知識の獲得という側面だけではなく、社会との交流および人間関係の維持・拡大を期待するところが大きいと考えられ、これらが主観的幸福感に影響を与えているとする研究が多い。昨今の高齢者を取り巻く状況を考えるならば、高齢者大学に自ら参加しプロダクティブな活動を行う高齢者が何を求めて学習に参加しているのかについて検討することは、これからの超高齢社会における私たちのあり方について何らかの示唆をもたらすものと考えられる。

目 的

今回の研究では高齢者大学にて継続的に学習を実践している高齢者を対象に、主観的幸福度の高低が彼らの持つ「老人イメージ」にどのような影響を与えているかについて、「老人」という言葉から連想されるイメージの自由記述の分析を通して明らかにすることを目的とする。さらにイメージの測定・分析方法としての計量テキスト分析の可能性についても検討を行うこととする。

方 法

対 象

1年制あるいは2年制高齢者大学にて継続的な学習に参加している高齢者109名(男性62名 女性47名)のうち、自由記述において有効回答が得られた95名を(男性52名 女性43名)分析の対象とした。平均年齢は68.23歳、SDは4.04歳。

高齢者大学にての学習歴については約69%のものが1年6か月以上継続していると回答し、そのうち2年以上と回答した者は約44%であった。

現在、職業を持っていないと答えた高齢者は49名(51.6%)、専業主婦と答えた高齢者は23名(24.2%)であった。何らかの形態で仕事を続けている高齢者は23名(24.2%)であった。

今回の調査を行った高齢者大学は東京都心より1時間ほどのベットタウンにあり、宅地開発が進んだ地域であるが、古くは城下町として栄えた歴史を感じさ

注) 日本における高齢者の学習活動は欧米における職業訓練的な位置づけとは異なり、人間形成や余暇のための活動という位置づけにより生涯学習という名称のもとに行われている。近年では自治体中心のプログラムだけではなく大学の公開講座や民間のカルチャーセンターなどのプログラムが台頭しその中心的な役割を担っている。老人大学、シルバー大学、シニア大学などさまざまな名称が用いられている。

せる場所に設置されている。まだまだ田園風景が多くみられ周囲には自然を感じさせる緑豊かな環境が残されている地域でもある。

調査方法および倫理的配慮

1. 倫理的配慮

配票調査方式で実施。

調査は無記名で行い、研究の趣旨、調査の協力に関しては個人の自由であり、協力できない者は回答せずによりこと、途中でやめても不利益を被らないこと、回答で得られたデータは統計的処理を行い、本研究の目的以外では使用せず、研究後は速やかにデータを破棄することを依頼書と調査用紙にて説明し、同意を頂いたうえで回答を求めた。

2. 調査項目

調査項目は基本的な属性と学習参加動機に関する質問、およびLawtonの改訂版PGCモラル・スケール、「老人」のイメージに関する自由記述からなる質問票を用いて個別に回答を求めた。自由記述に関して、「老人」ということばから連想されることを以下の回答欄に自由にお書きください」という教示を付し回答を求めた。

回収は、各自投函していただくことを依頼し、郵便にて行った。

table 1 高齢者大学へ通うようになった理由

項 目	度数	相対度数
1 学習内容に興味があるから	59	54.1%
2 健康維持のため	41	37.6%
3 講師が魅力的であるから	5	4.6%
4 参加費が安いから	14	12.8%
5 自宅から近いから	21	19.3%
6 余暇を有効に使いたいから	62	56.9%
7 退職して時間的余裕ができたから	47	43.1%
8 これまでの学習を続けたかったから	4	3.7%
9 仲間の輪を広げたいから	66	60.6%
10 趣味を身につけるため	17	15.6%
11 学習内容を地域活動などに活かしたから	30	27.5%
12 ほかの人がみんな行くので	1	0.9%
13 仲間や友人にさそわれて	11	10.1%
14 家族にすすめられて	5	4.6%
15 これからの生活を豊かにしたいと考えたから	58	53.2%
16 なんとなく	1	0.9%

(高橋 2018から)

結 果

高齢者大学へ参加動機

高齢者大学に通うようになった理由について回答

を求めた結果、「仲間の輪を広げたいから」(60.6%)、「余暇を有効に使いたいから」(56.9%)、「これからの生活を豊かにしたいと考えたから」(53.2%)、「学習内容に興味があるから」(54.1%)のどの項目に対する回答が多かった。

主観的幸福度 (PGCモラル・スケール)

PGCモラル・スケールの平均得点は12.83 (SD=3.84)であった。自主的に高齢者大学に参加している高齢者のためPGC モラル・スケール尺度の標準的な平均得点よりも高い傾向がみられた。

このPGC得点を用いて+0.5SD以上(15点以上)を高PGC群、-0.5SD(10点以下)を低PGC群、それ以外を中PGC群として設定をした(table 2)。各群の平均値を求め検討を行ったところ有意差が確認されている($F=242.02$ $df=2,92$ $p<0.00$)。

table 2 PGC 各群の基本統計量

	度数	平均値	標準偏差
低PGC群	20	6.5	2.88
中PGC群	36	13.06	0.98
高PGC群	39	15.87	0.89
合計	95	12.83	3.84

「老人」イメージの自由記述の回答

「老人」イメージの自由記述の回答には以下のようなものが見られた(一部修正、抜粋)。

1. 高PGC群

- 「自分はいつまでも若いと思っているが文や本に目をやるとたしかに老人なのだ。親が自分の年令の頃はかなり老人だと思ったがいざ自分がその年令になるとまだまだ若いと勝手に思う。動いているようでも動きは確かに遅くなっている。」
- 「老人とは経験の蓄積である。老いとは人生の終着に向かう一過程である。老いは人生を豊かにするはず、又、その時点で生きがいがいなければならない。」
- 「老人」ということばは嫌です。自分がそういう年廻りになったからというわけではなく、かつてのイメージとは大きく様変わりしていると思います。子どもの頃、60代の人をみると「年より」とか「ジジイ」などと思っていましたが、自分がその年になってみると、老人のイメージが全然違うことに気づいていま

す。気持ちはあの頃と全く一緒に、肉体的な衰えは仕方ないにしても、意欲や考え方は変わっていないと自覚しています。「生涯青春」が目指すところで、挑戦することと感動することは忘れず、精神は持ち続けたいと思います。これからはあまり先のことは考えずに、今現在を楽しむということに全精力を傾けていこうと考えています。」

2. 中PGC群

- 「現時点ではあまり考えたくない項目です。現在は老人であっても多くの事を体験し学び、地域活動に知識として還元したい。体が動ける内は、何ごとにも挑戦者として、取り組みたいと思っている。」
- 「体も心も人の役に立たないようにになってしまうこと。よばよばの歩き、目的意識がない人。体は日々老いてゆくが、心はいつまでも生き生きと自由でありたいと願っています。」
- 「昔は、おばあちゃんという随分年をとっていると感じましたが、自分がいざ、おばあちゃんになってみると、気持ちも行動も以前とあまり変わらないと感じました。他人から見ると、年をとっているように見えるかもしれませんが、健康であれば年齢に関係なく自分に目標を持って、少しでも、社会に貢献出来るような生き方を見つけて進んでいくべきと思います。」

3. 低PGC群

- 「老人は杖をついて、ヨボヨボと歩いている姿しか思い浮かびません。私の住んでいる地域は長寿の地域で、80才を超えるような人達がバリバリと畑仕事をしています。私よりはるかにたくましく、手際よく立派にやっています。健康です。知識が豊富です。したがって、この地域では、老人というイメージはなく、先輩というイメージです。」
- 「いやな連想しかない。他に言葉はないのだろうか、ないだろう。」
- 「老人ということばは嫌いです。自分がそれにあてはまる年齢になって、なお嫌いになっています。たくさんさんの経験と知識を持った賢い人のような意味もあったように昔は思いましたが、自分がそのような年齢になり、周囲にも増えてくると、『身体と同時に心も自由にならない人間』のイメージになってきました。『がんこで、わがままな年寄り』のイメージが

強くなり、何か悲しいですね。もっと違う言葉がいいな、違う呼び方はないのか、と思いますね。」

table 3 自由記述頻出語一覧 (5回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
老人	86	体力	11	思える	6
人	74	良い	11	身体	6
思う	71	気持ち	10	先	6
自分	39	多い	10	豊富	6
言葉	27	健康	9	感じ	5
言う	24	元気	9	関係	5
イメージ	23	生きる	9	頑固	5
才	23	体	9	強い	5
若い	21	人間	8	見る	5
年	20	知識	8	死	5
年齢	20	連想	8	自分自身	5
考える	15	老いる	8	出来る	5
経験	14	違う	7	人達	5
現在	13	家	7	生活	5
今	12	持つ	7	他人	5
社会	12	自由	7	動く	5
取る	12	年寄り	7	豊か	5
昔	12	悪い	6	古い	5
感じる	11	意味	6		
人生	11	使う	6		

いずれの群においても「老人」のイメージとしてネガティブな側面から捉えながらも自らのあり方としてはそれを否定する記述が多くみられた。回答の際に文字数を求めているわけではないが、長文のものが多くみられた。また、簡潔に表現された回答には「頑固」「年寄り」などのステレオタイプなイメージが記述されたものがみられた。

抽出語の出現頻度

自由記述から抽出された“ことば”の出現頻度はtable 3の通りであった。

頻出語のうち教示文に含まれていた「老人」（年寄り、老いる、年老いるも含め）「ことば」を除くと「年齢」「経験」「社会」「人生」「体力」「現在」などの“ことば”の出現が多くみられた。

自由記述の計量テキスト分析

「『老人』という“ことば”から連想されることを回答欄に自由にお書きください。」という質問に対する自由記述の回答を用いて計量的テキスト分析を行った。分析には樋口(2012)のKH Coder (Ver.2.00f)を使用した。外部変数としてPGC得点による3つのグループを取り込み、PGC群と抽出語の関係を可視化することを試みた。

1. 対象者に見られる「老人イメージ」の共起ネットワーク

自由記述によって得られた回答から「老人イメージ」を可視化するために共起ネットワークを作成した。その結果、Fig.1に示されるように抽出語の結びつきが示された。

特徴的な抽出語の結びつきとして、「自分一年齢—老人—若い—思う—感じる—ない」、「知識—経験—豊富—豊か—頑固」、「青春—肉体—体力—衰え」、「外見—努力—頑張る」、「他人—聞く—出来る」などがみられた。

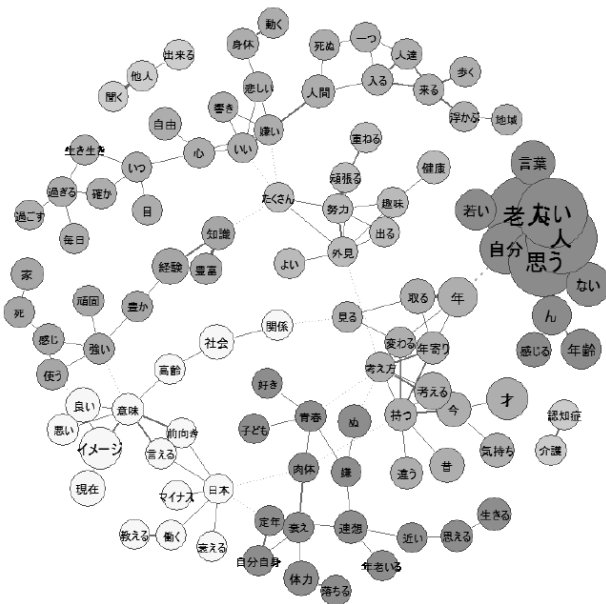


Fig.1 「老人」イメージの共起ネットワーク

2. 主観的幸福感と老人イメージの自由記述の関係

PGC群を外部変数とした対応分析を試みた結果、Fig.2のような抽出語の結びつきが示された。PGC3群に共通した抽出語は「自分」「老人」「言葉」「思う」「言う」「ない」が示された。

高PGC群では抽出語として「若い」「動く」「考える」「今」「連想」などがみられ、中PGC群では「人生」「健康」「体力」「死」「良い」などの抽出語が示された。低PGC群では「知識」「頑固」「働く」「意味」「悲しい」「死ぬ」などの抽出語が見出されている。

また、高PGC群と中PGC群では「年齢」「年」「感じる」、中PGC群と低PGC群では「現在」「経験」「イ

メージ」を、そして、低PGC群と高PGC群では「社会」「昔」「多い」などの抽出語が共有されていることも示された。

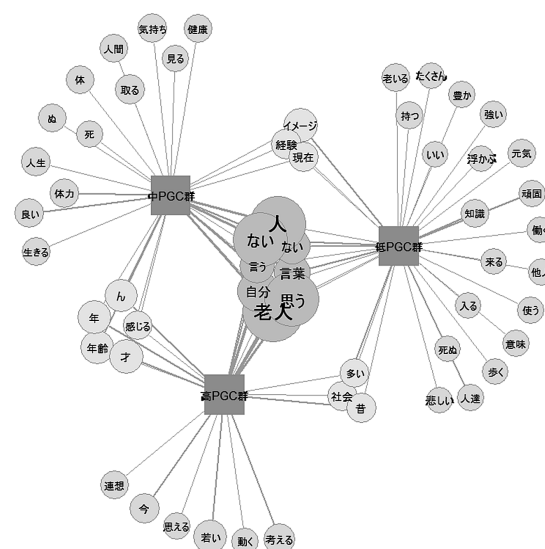


Fig.2 PGC群毎「老人」イメージの共起ネットワーク

考 察

高齢者大学への参加動機とその特徴

前述した通り、参加動機として多く示されていたのは、

- 「仲間の輪を広げたいから」
 - 「余暇を有効に使いたいから」
 - 「これからの生活を豊かにしたいと考えたから」
 - 「学習内容に興味があるから」
- などである。

高橋(2018)は、高齢者の高齢者大学への参加動機に要因として「参加すること」と「学ぶこと」の2つを導いている。そして今回も同様に参加動機の回答結果において、高齢者の場合「知識の獲得」への期待よりも対人関係の拡大や余暇への期待が高齢者大学での参加動機になっており、「参加費が安いから」など経済的な負担や、「自宅から近いから」などの物理的な距離は、参加動機にはあまり影響していないことが示された。

また、「学習内容を地域活動などに活かしたいから」や「健康維持のため」などを選択する高齢者も少なくないことを加味すれば、学ぶだけではなくその知

識を用いた情報発信や地域貢献を通して健康維持を求めていることもうかがえる。

内閣府の「平成29年度版高齢社会白書」(2017)によれば、自主的なグループ活動に参加したことがある高齢者が活動全体を通じて参加してよかったことは、「新しい友人を得ることができた」(48.8%)が最も多く、次いで「生活に充実感ができた」(46.0%)、「健康や体力に自信がついた」(44.4%)の順となっている。これらの結果も今回の結果と同様の傾向を示していると考えられる。

主観的幸福度 (PGCモラル・スケール) について

PGCモラル・スケールの全体平均得点は12.83 (SD=3.84)であった。健康な高齢者の場合、PGCモラル・スケールの平均値は11点~12点といわれており、一般的な高齢者の得点よりも高い傾向がみられた。

PGCモラル・スケールを用いた多くの研究では対象者年齢が今回の調査対象者よりも高いこと、健康な高齢者だけではなく日常生活に制限があるなど幅広い対象からデータを得ていることもあり、今回は、一概に数値的な比較を行うことはできないと考えられる。さらに、今回の調査の対象となった地域は鉄道も発達した地域ではあるが、高齢者大学の所在地は最寄り駅からも離れた住宅街にあり、高齢者が通学方法としてほぼ自家用車が用いられている。自ら運転をして通うことができる高齢者のQOLは比較的高く、また経済的にも余裕を持てる状況にあることと推測される。これらの要因がPGCモラル・スケールの得点に肯定的に影響していることが考えられる。

「老人」イメージの自由記述

大学生に対して行った「老人」イメージの自由記述による高橋(2013)の研究では、大学生自身が自らの「老人」としての姿を想像して回答させていることから、将来像として肯定的なイメージを有する傾向があることを示している。自分には否定的な将来は訪れないかのような楽天的なイメージであり、その代表的な表現として「元気でかわいいおばあちゃん」などがみられるとしている。

今回の高齢者を対象とした調査では、若年大学生と比較して、高齢者の回答はその記述が豊かな表現と長文で記述されている傾向がみられた。自らを回

顧するような内容の文章や世間一般から持たれているイメージが実態とは乖離しそれに対する反論を訴えるような内容のものがみられた。中には高齢者に対する否定的なイメージを表すような「頑固」などの一般的な特徴や、「死」を表すような表現が用いられているものもみられた。

健康的で活動的な高齢者は、「老い」は現実なものとして受け入れねばならない現象として捉えているものの、「老人」と他者から表現されることについては抵抗を感じるようである。このように相反する思いを持っていることを窺うことができる。

計量テキスト分析の結果から

1. 対象者に見られる「老人イメージ」の共起ネットワークから

今回の調査の対象となった高齢者に見られた特徴的なノードの結びつきとして、「自分—年齢—老人—若い—思う—感じる—ない」、「知識—経験—豊富—豊か—頑固」、「青春—肉体—体力—衰え」、「外見—努力—頑張る」、「他人—聞く—出来る」などがあげられる。

この結果から、「自分は若いと思う」、「自分は年齢を感じない」という老いへの抵抗を示すようなノードの結びつき、逆に「肉体、体力の衰え」、「認知症と介護」のように衰えを示す結びつきもみられ、「老人」イメージとして自由記述においては身体的生理的変化を示すようなことばが中心となると考えられる。

また、「知識や経験が豊富」、「人の話を聞くことができる」、「年をとって考え方が変わる」などの身体的な衰えを知識や思考の柔軟さをもってカバーするような“ことば”の結びつきもイメージを構成するものと考えられる。

2. 主観的幸福感と老人イメージの自由記述の関係から

1) 共起ネットワークから見た全体的な傾向

PGCモラル・スケールの得点によって今回は3群に分け、抽出語の共起性について検討を行った。PGC3群に共通した抽出語は「自分」「老人」「言葉」「思う」「言う」「ない」が示され、高齢者大学に通う健康な高齢者が共通して持つ「老人」ということばから示されるイメージあるいは考え方として、「自分は老人とは思わない」との意図を含むものであると

思われる。特に高PGC群と中PGC群にこの傾向が強いことから、主観的幸福度が高く、自ら自動車を運転し高齢者大学に通うなど身体的な問題が少なく、学習意欲も旺盛な高齢者は「老人」と言われることに対して否定的な考え方を持っていることと思われる。

古い資料ではあるが、橘(1971)が報告しているように、多くの人が実際に自らを「老人」として認めていくのは、おおよそ70歳ぐらいではないかとしている。今回の調査対象者の平均年齢68.23歳と70歳に近い年齢になっているが1970年の簡易生命表による平均寿命は男性69.31、女性74.66であったことを考えると(2017年の平均余命は男性81.09年、女性87.26)、現在においてはさらに10年ほど経過したのちに「老人」としての自覚が出現する可能性も否定できない。このような点からも「まだ若い」と考える高齢者が多いことも理解できる。

2) 各群に見られる共起性の特徴

高PGC群では抽出語として「若い」「動く」「考える」「今」「連想」などがみられ、「今は若く動くことができると考えている」というイメージあるいは印象を有していると思われる。また、中PGC群では「人生」「健康」「体力」「死」「良い」などの抽出語から、「良い人生には体力と健康」という現実的な視点で「老人」のイメージを捉える傾向が示されている。さらに、低PGC群では「知識」「頑固」「働く」「意味」「悲しい」「死ぬ」などの抽出語がみられ、「頑固だが、豊かな知識を持っている」「死ぬ人たち」という正負のイメージや印象を同時に表現するような傾向が見られた。このようにPGC得点の高低によって「老人」のイメージを示すことばの使用によって違いがみられると考えられる。

また、高PGC群と中PGC群では「年齢」「年」「感じる」という抽出語を共有していることから、主観的幸福感が高い傾向に高齢者は「老人」とであると評価されることには抵抗を感じているものの、現実には「年を感じている」との自覚がことばとして表出される傾向にあり、客観的な認識と主観的な評価に相反する面を垣間みることができる。

さらに、中PGC群と低PGC群では「現在」「経験」「イメージ」という抽出語を共有していることから、主観的幸福感が低い傾向にある高齢者は「現在の

経験やイメージ」という現実的な側面から「老人」のイメージに対して否定的に捉える傾向が感じられた。

そして、低PGC群と高PGC群という主観的幸福感が明らかに異なる群間で「社会」「昔」「多い」の抽出語を共有していることが示されたが、高PGC群は「昔」との共起関係が強いことから、「今も昔の若いときのことを考える」という回顧的なイメージが見られる。それに対して、低PGC群では「多い」との共起関係が強く、「頑固で知識のある人が多い」、「死ぬ人達が多い」というイメージが示していることからそこにはステレオタイプな見方があると考えられる。

まとめ

継続的に学習を実践している高齢者は「老人」という“ことば”に対するイメージとして共通して「自分は老人とは思わない」という記述を行っていることが示されている。またPGC得点が高くなるにつれて「年齢は感じるが、自分は若く動くことができると思う」という活動的な側面を捉えるのに対して、PGC得点が低くなるにつれて「知識はあるが頑固で死に向かう人達のイメージ」という現実的でありながら否定的な側面を捉えている傾向があると思われ、主観的幸福感の高低が「老人」という“ことば”のイメージに影響を与えている可能性が示されている。

計量テキスト分析またはテキストマイニングを用いた研究方法は新しい示唆を与えてくれる可能性が高いと考えられるが、その反面、解釈は依然として研究者の主観に頼るところが多い。解釈の基準となる指標を示すことも今後の課題として検討していくことが求められる。

引用文献

- 石井留美 (1997). 主観的幸福感研究の動向 コミュニティ心理学研究. 1, pp.94-107. (Ishii, R. 1997 Recent research trend of subjective wellbeing studies. Japanese Journal of Community Psychology, 1, 94-107.)
- 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明 (1993). 中学生の老年観—老人観スケールによる測定— 社会老年学, 38, pp.3-12.
- 樋口耕一 (2012). 社会調査のための計量テキスト分析 内容

- 分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 堀薫夫・福島順 (2015). 継続性から見た高齢期における学習意欲の変化に関する調査研究 大阪教育大学紀要 第IV部門 63,2, pp.91-100.
- 堀薫夫 (2012) 教育老年学と高齢者学習 学文社
- 保坂久美子・袖井孝子 (1988). 大学生の老人イメージSD法による分析ー 社会老年学 27, pp.22-33.
- 保坂久美子・袖井孝子 (1986). 大学生の老人観 老年社会科学 8, pp.103-116
- Lawton, M. P. (1975). The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision. Journal of Gerontology, 30, pp.85-9.
- Larson, R. (1978). Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans.
- 内閣府 (2017). 平成29年度版高齢社会白書 内閣府
- 中野いく子 (1991). 児童の老人イメージSD法による測定と要因分析ー 社会老年学 34, pp.23-36.
- 百瀬ちどり・村山くみ (2013). 地域在住老年期にある人の主観的幸福感と影響要因：シニア大学受講者の生活満足度と身体的・社会的・対人交流の側面からの検討 松本短期大学研究紀要 (22), pp.93-102.
- 中野いく子・冷水豊・中谷陽明・馬場純子 (1994). 小学生と中学生の老人イメージSD法による測定と比較ー 社会老年学, 39, pp.11-22.
- 中谷陽明 (1991). 児童の老人観ー老人観スケールによる測定と要因分析ー 社会老年学 34, pp.13-22.
- 野邊将雄・大須賀翼 (2013). 高齢者の友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響 (その1)ー香川県さぬき市の老人大学受講者を対象としてー 岡山大学大学院教育研究科研究収録 156, pp.39-48.
- 長田篤・山縣然太郎・中村和彦・宮村季浩・浅香昭雄 (1999). 地域後期高齢者の主観的幸福感とその関連要因の性差 日本老年医学会雑誌 36(12), pp.868-873.
- 下仲順子 (1997). 現代心理学シリーズ 14 老年心理学 第13章 高齢者の主観的幸福感と社会参加 培風館
- 橘覚勝 (1971). 老年学 誠信書房
- 高橋一公 (2006). 福祉専攻学生の高齢者のイメージ 身延山大学仏教学部紀要, 7, pp.133-146.
- 高橋一公 (2007). 大学生の一般的老人イメージと将来の自己老人イメージー老人観スケールを用いた分析ー 身延山大学仏教学部紀要, 8, pp.133-146.
- 高橋一公 (2008). 社会福祉を専攻する学生の一般的老人イメージと自己老人イメージーセマンティック・ディファレンシャル法を用いた老人イメージの分析ー 身延山大学仏教学部紀要, 9, pp.15-36.
- 高橋一公 (2012). 将来像としての「老人観」の測定(1)ー一般的老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通してー 東京未来大学研究紀要, 5, pp.61-72.
- 高橋一公 (2013). 大学生の老人イメージ測定の試みー自己老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通してー 東京未来大学研究紀要, 6, pp.85-94.
- 高橋一公 (2018). 高齢者の学習動機と主観的幸福感に関する研究 高齢者大学への参加動機と主観的幸福感の関係 モチベーション研究Annual Report 第7号 pp.2-9.

Study on how elderly people who study in the senior citizen college tend to have “the old people image”

The relevance between “the old people image” and “subject well-being” which in the free descriptive answers

Ikko TAKAHASHI (*Tokyo Future University*)

The study is aimed at conducting a survey and an analysis of “subjective well-being” and “the old people image” of 95 elderly people (average age: 68.23) who learn continuously at the senior citizen college. I analyzed “the old people image” in the answers by the free description using text mining.

As a result of the analysis, it became clear that the elderly persons who learn continuously at the senior citizen college had an image “I do not think I am one of the old people” in common. And, as the score of PGC morale scale rises, the research subjects have a more active image such as “I am young and active although age is felt”. On the other hand, as the score of PGS morale scale lower, the research subjects have a realistic and negative image such as “the old people are stubborn, just wait for death although they are knowledgeable.”

In conclusion, it was shown that the strength of subjective well-being has affected “the old people images.”

Key words: old-people image, senior citizen college, subjective well-being, quantitative text analysis

—2018.12.13受稿,2019.1.20受理—